

園長だより

あつい、あついと言いながらも酷暑の夏を乗り切らなければなりません。園長だよりを発売してもうすぐ1年が経過します。地道にこつこつとは、いささか大変さを実感していますが伝えたいことが途絶えない限り継続していきます。

音楽教育の見直しから1年が経過

1年前の便りで音楽教育の再考、見直しにふれました。 ※ 以下掲載内容

私が園長に就任した25年度、おおぞら保育園の音楽領域には多岐にわたる教育内容があり、リズム、うた、リトミック、器楽(楽器を使う)そして当時、力を入れて取り組んでいこうとするわらべうたがあり、指導計画の中に幾つもの教育内容が存在していた。

当時は保育内容再編の兆しが出てきた頃といえ、音楽教育の方向性を出す過渡期に入っていました。

「職員の実践的な学習がスタート」

26年度から本格的にわらべうたの学習機会をつくり、子どもたちの生活に取り入れ定着させ今日まで継続しています。

わらべうたの講師を定期的に招き、子ども達との実践の指導を受け、保育内容に反映することを繰り返し行ってきました。

前回の便りでも記述しましたが新たに取入れ、力を入れていこうとする内容(活動)と以前から存在する活動を吟味し、検討し

子ども達にとって最善の方向性を見出していく過程にあります。

1年前の文面からひしひしと意欲が伝わってきます。幾度の検討から職員総意のもと大切に保育に位置づいてきた(わらべうた)を音楽教育の中心に据えて実践しています。



「人間性の育み」

わらべうたは音楽教育のみならず、人として生きていくための人間性の育みに大きな力となるものと考えています。

前年度6月の園だよりにて「人と人とをやりわらかく繋いでくれるわらべうた」と題し掲載がありました。以下こんな文面です。

おおぞら保育園ではわらべうたを通して人とのつながりに焦点をあて、乳幼児期から順番、交代など秩序や社会性なども感じて欲しいと考えています。子ども同士のコミュニケーションは基より子どもと保育士との関係のツールとして大活躍しています。

中略

わらべうたは今も子どもの心に響きあい、言葉の心地よいリズム(鼓動)と温かさで子ども達を楽しませ、また勇気づけてくれています。

一対一で子どもに向き合うことで優しい気持ちになり、表情が穏やかになることで、子ども達と向き合う姿勢が変わります。そして、そのことによって育まれた関係性で不安感がなくなり目が輝いてきます。

わらべうたは人とのふれあい、人との信頼感を深めていく大きな力になると子ども達の様子をみて思います。

わらべうたの授業 (4歳 5歳児の取り組み)

わらべうたの授業について

わらべうたをすることの大きな目的は子ども達が音楽を好きになることにあります。最も柔軟と言われる幼児期に音楽的な能力の発達を大人の働きかけによって楽しみながら獲得していくことです。

わらべうたの授業はいつもの遊びを音楽的な目的をもち、わらべうたをすることです。

取り組みの中では

リズムを感じる力 (リズム感)

- ① 拍 ② リズム ③ 速い、遅い

音楽を聴く力 (聴感)

- ① 清潔にうたう
② 高い 低い
③ 大きい、小さい
④ 内的聴感
⑤ 音色

上記が授業の要素となり計画を立案し子ども達とわらべうたを実践しています。

わらべうたは単に遊びのツールではなく、音楽的な視点からみても子ども達が体験し獲得していくものが幾つも具備されています。

みかん組 「りょうしさん」 2018.8.9



「りょうしさん」

りょうしさん りょうしさん

きょうのえものは なんだろうな ドカン
役交代の遊びです。

鬼を一人決める(漁師) 鬼は目隠しして真ん中に立つ、周りの子ども達は手をつないで鬼の周りを回る。「ドカン」で鬼は好きな方向を指し、さされた子は好きな動物の鳴きまねをする。鬼は声の主を当てると鬼役交代となる。

「保育士の学び」

わらべうたについての学び(研修)も継続しています。

子ども達との実践に加え、職員で学びの場を設定しわらべうたの講師を招いて指導を受けています。



授業の研修 8.9

今年度に入り、意欲、意識は向上しています。各年齢の課題を異なるクラスの職員にも共有できるように打ち合わせ後の限られた時間を使って一緒に行ってみたり、子ども達と行う授業を職員で行ってみたりと学びに積極的な姿が見られています。

子ども達の成長を願わずにいられない先生の学びが子ども達の成長に結びついていることを実感しています。

(園長 廣部信隆 23)